

## 日韓がともに生きる起点となれ

森山新（お茶の水女子大学）

「日韓大学生国際交流セミナー」は、今年で12回目を数え、戦後ヨーロッパを戦争から共生へと導いた「複言語・複文化主義」の考え方にに基づき、韓国の言語と文化を学び、日本の言語と文化を教えながら、東アジア人としての国際的な人材を育成するプログラムとして再出発した。参加者も8名に拡大した。

私とティーチングアシスタントの佐々木とは、6週間にわたる本プログラムの最終週に訪韓し、学生たちの教壇実習を見学した。釜山外大の各指導教員の細かな手ほどきのもとに、教案の作成から模擬授業、事後の振り返りと休む間もなく実習に励む学生の姿は時に痛々しくもあった。誰一人として、教壇に立ち、日本語を教えた経験のない学生たちは、連日、徹夜に近い準備を行い、最終週は4コマの授業全てを教員に代わって担当した。当初は緊張が肌で伝わる場面も多かったが、それでも綿密な準備を背景に、ある時は大胆に、ある時は堂々と、そして明るく、教壇実習をこなしていた。指導教員と本学スタッフの厳しい指導の中、時には涙し、くじけそうになることもあったが、それでも最後の最後まで明るさを失わずに、与えられた授業を全うした学生たちは立派だった。

今年度は日程最後の9月14日に、「第1回日韓学生フォーラム」を開催し、日韓が、そして東アジアがともに生きるために、若者は何ができるのか、対話と討論の場を持つことができた。まずは私が「東アジア共同体とナショナリズムを克服したグローバルな観点」という題名で本プログラムの趣旨を語り、その上で日韓の学生が、対立の過去をいかに共生の未来へと転換していくか、熱心な対話と熱い討論が交わされた。

釜山外大とは昨年度国際学術交流協定が締結されたが、交流は2007年より始まっていた。2007年から毎学期TV会議システムを活用した国際合同遠隔授業を行い、両国に横たわる様々な問題、ステレオタイプ、コンフリクトなどを日常的に取り扱ってきたのははじめ、2011年度からは、東日本大震災に端を発し、釜山外大からも学生を招き、世界8か国の学生が本学に一堂に会し、毎年「国際学生フォーラム」を開催、世界の災害に若者は何ができるかを話し合った。2015年には、戦後70年、日韓国交回復50周年を記念し、本学の学生35名を連れて釜山外大を始め韓国の3つの大学を訪問し、両国の過去、互いの良さ、そしてともに歩む未来について話し合った。そうした両大学による一連の歩みにとって、そして日韓、さらには東アジアにとって、今年度は非常に意義深い、重要な年になったと言っているであろう。

両国の学生たちは、ともに生きるための「複言語・複文化主義」に促され、ナショナリズムを克服し、積極的に交流を展開し、今まで以上に深い絆に結ばれ、再び釜山外大に留学したいと答える学生も現れた。釜山外大の教員、スタッフの方々も、そのように大きく変わりゆく本学の学生を見ながら、苦勞の多い本プログラムの開催に大きな手応えを感じていた。

複言語・複文化主義は、他の言語・文化を学ぶことを通じ、母語と母文化を中心に今まで当然視していた価値観を相対化し、他の文化に関心と敬意を持つことで、ナショナリズムを克服し、ヨーロッパが、そしてアジアがともに生きるための国際的なアイデンティティ構築に寄与するとされている。もちろん、知識として、またスキルとして他の言語・文化を学ぶだけで、このような変化を引き起こすことは難しいであろう。しかし、それを積極的に促す交流の場を提供し、お互いに対する愛情と尊敬の気持ちを育み、

正しい知識とナショナリズムを超えた視点に基づいて相互理解を深め、実際の行動を伴う全人的な交流を通じてであれば、対立を和解に、そして共生へと導く変化は着実に起こりうるということを今回のプログラムを通じて痛感している。

9月14日には、両校の今後の交流について釜山外大の教員、および国際交流チームの方々と話し合いの場が持たれ、より積極的で深化した交流を進めていくことで合意した。その場では、今年、プログラムによって大きく成長した本学の学生の姿が釜山外大のスタッフから語られた。

釜山の地はこれまで、日本と韓国の間にあって、いくつもの悲しみといくつもの喜びを経験してきた。豊臣秀吉の時代にはまずもって日本の被害に合い、その後徳川幕府の関係修復により、朝鮮通信使派遣の起点となった。しかし植民地時代には、歌「釜山港に帰れ」にあるように、多くの民が日本へと連行される悲劇の舞台となった。そうした悲しみを乗り越えながら、釜山は今、日本と韓国、そして東アジアをつなぐ基点として生まれ変わろうとしている。釜山外大には「アジア共同体研究所」が設けられ、毎年「アジア共同体論」という授業が行われている。また釜山外大は、ヨーロッパが欧州共同体建設のために策定した「ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）」の指導法をいち早く採用し、日本語教育を行っている。私が釜山外大に注目し、協定締結にこぎつけ、交流を開始した理由がそこにある。

今回築いた重要な一歩を、今後さらに発展させ、近い将来、東アジアがともに生きる未来をこの学生たちの手で作りあげられることを祈り、期待してならない。

今回、このように貴重な進歩を遂げることができた背景には、様々な形でプログラムを提供してくださった、釜山外大の日本語創意融合学部の諸先生、国際交流チームのスタッフのご尽力があつてのことである。この場を借りて心から感謝したい。